

P-049

パンデミック初期に見られた
ADHD児の感染対策の困難とその要因山本 知加¹、藤野 陽生¹、田中 早苗³、吉村 優子^{2,3}、
吉崎亜里香¹、橘 雅弥¹¹大阪大学大学院 連合小児発達学研究所²金沢大学 子どものこころの発達研究センター³金沢大学 人間社会研究域

【目的】

注意欠如多動症 (ADHD) の人ではCOVID-19罹患リスクが高く、成人では衝動性や不注意さと感染対策の不遵守が関連していたことが報告されている。ADHD児はADHD成人よりも感染リスクが高い可能性も指摘されており、ADHD児の感染対策の実施に向けた取り組みが求められる。本研究では、パンデミック下における感染対策の困難とADHD診断の関連を検討し、ADHD特性のある子どもへの感染対策における支援法の在り方について検討を行う。

【方法】

神経発達症の小・中学生をもつ養育者が感じたCOVID-19パンデミック初期における困難とニーズを把握するため、大阪大学医学部附属病院小児科発達外来および金沢大学子どもの発達研究センターにおいて行われた神経発達症の子ども133名の養育者を対象とした調査データの一部を使用した。感染対策の困難：日本国内においてパンデミック下で推進された6つの感染対策の困難の有無、子どもの診断：養育者の認識している子どもの神経発達症診断(ASD、ADHD、知的発達症、限局性学習症)、感染対策の困難の理由：発達障害の子どもで想定される感染対策の困難の理由を複数選択可能な選択肢により尋ねた。ADHD診断と感染対策の困難の関連を検討するために、各感染対策の困難を目的変数、子どものADHD診断、年齢、性別を説明変数とし、ロジスティック回帰分析を行った。また、ADHD診断があり、かつ感染対策に困難を抱えていた子どもを対象とし、感染対策が困難であった理由として各選択肢が選択された割合を算出した。

【結果と考察】

ADHD診断がある子どもは、ADHD診断のない神経発達症の子どもと比較し、手洗い(OR:2.82,95%CI:1.23-6.46)、毎日の健康チェック(OR:3.86,95%CI:1.57-9.44)に対する実施困難のリスクが高かった。これらの感染対策は、自律的に行わなければならない、成人の先行研究と同様にADHD症状が困難につながった可能性が考えられる。また、困難であった理由として選択されていたものでは、「必要性は理解しているが忘れてしまう」というものが54.3%と、最も多かった。今回のデータはパンデミック初期のものではあるが、ADHD児の感染対策の実施には、子どもが実施を思い出すための環境調整が重要であることが示唆された。

P-050

軽度知的障害児・境界域知能児の就学
直後の学校適応に関する実態調査佐藤 翔子¹、橋本 創一²、小柳 菜穂¹、岡本 茉桜¹、
石川 卓磨¹、山口 遼³、田中 里実⁴、三浦 巧也⁵¹東京学芸大学大学院²東京学芸大学³国立特別支援教育総合研究所⁴国立特別支援教育総合研究所⁵東京農工大学

【目的】

学校適応に課題を抱えやすい小学1年生のうち、軽度知的障害児(以下、軽度)および境界域知能児(以下、境界域)の適応状況・必要な支援について実態を把握する。

【方法】

20XX年に、首都圏の小学校及び特別支援学校の小学1年生の担任教諭を対象に質問紙調査を実施した。有効回答953件のうち、軽度と境界域の児童に関する回答170件を分析対象とした。

【調査内容】

①児童の障害 ②簡易版ASIST学校適応スキルプロフィール(A尺度:5領域20項目、B尺度:9領域22項目)。ASIST(橋本他, 2014)は、学校適応について「適応スキル(A尺度)」と「不適応行動(B尺度)」の2つの側面から測定し、得点が高いほど適応スキルが身についている(A)、または、困難を抱えている(B)ことを示す。

【結果】

軽度(N=120)と境界域(N=50)との比較では、A尺度の合計得点および下位領域の「手先の巧緻性」「言語表現」で境界域の得点が有意に高かった。B尺度は、合計得点には有意差がみられず、下位領域の「感覚過敏」は境界域、「話し言葉」は軽度の得点が高かった。発達障害の有無(あり:N=95、なし:N=75)で比較すると、B尺度合計および下位領域の「こだわり」「感覚過敏」「興味の偏り」「多動・衝動」において、あり群の得点が有意に高かった。障害種(ASD:N=50、ADHD:N=15、ASD+ADHD:N=6、情緒:N=4、なし:N=95)による比較では、A尺度・B尺度いずれも合計得点での有意差はみられなかったが、B尺度の下位領域である「話し言葉」において、ASD群の得点が高かった。

【考察】

境界域と軽度の比較では、適応スキルの「言語表現(ひらがな・カタカナの読み等)」および不適応行動の「話し言葉(話す内容のまとまりや説明の苦手さ等)」において差がみられ、軽度の方が言葉に関するスキル習得に困難が生じやすいことが明らかとなった。一方で、不適応行動の「学習」に関しては差がみられなかったことから、入学直後の児童については授業やテストではなく、生活の中で困り感を見つけてあげることが重要であることが示唆された。また、不適応行動については、発達障害の影響が大きいことが明らかとなった。よって、知的発達のレベルというよりは、個人差に対応した支援を行うことが重要であるといえるだろう。